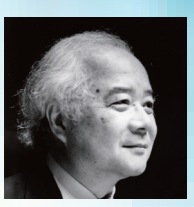

小林道夫　×　J.S.バッハ

――小林先生がバッハに最初に出会ったのはいつですか？

終戦後、ピアノを習い始めた中学1年の時です。

――その時の印象はどうでしたか？

あまり覚えていませんし、よくわかりませんでした。何でこういうものをやるのかなぁと・・・。面白い音楽だなと思うようになったのは、高校3年生ぐらいに、自分のお小遣い少年合唱によるカンタータ78番のレコードを買ったときです。第2曲目を聴いて、なんとも美しい音楽で、こういうものが世の中にあるのかと・・・。それがバッハの魅力に触れた最初の経験でした。その後しばらく何もなかったのですが、決定的にバッハの凄さを思い知らされたのは、初来日したカール・リヒター（ドイツ・1926－1981年）指揮のミュンヘン・バッハ合唱団と管弦楽団が、ニッセイ劇場で演奏したロ短調ミサ曲を聴いたときです。

――ロ短調ミサ曲はその時初めて聴かれたのですか？

いいえ。ロ短調ミサ曲は知ってはいたのですが、終演後もしばらく席から立ち上がることができないほど、もの凄い衝撃で、リヒターのロ短調ミサ曲を聞いて、これがバッハだったとしたら私は今まで何をやっていたのだろう、ちょっと人前でバッハ弾くのをやめよう、と思ったくらい凄かった。

音楽というのはただ精神的なものとか、ただ感覚的なものとか、あるいはそれを適当にミックスしたものとか、なんとなくそういうもので成り立っているものと思うのですが、バッハの音楽というのは少し他の人の作品と違い、それに加えて完璧な調和と完璧な秩序があるような気がします。その秩序というのは、例えば大自然の中の小さな花の完璧さとか、人体の臓器機能の完璧さとか、そのような完璧さです。バッハにとっては、（あの時代ですから）キリスト教の神様が行った仕事や、バッハの世界観みたいなものが一緒になって、全体の調和と秩序、そして、そこから感じられる美しさを感じながら仕事をしていたのではないかと思います。だから、感覚で音楽を作っていたわけではないと思います。大作曲家にはそういうものがあると思うのですが、その度合いがバッハほど凄かった人はいないのではないかなと思います。だから、バッハの音楽というのはいまだに時代とか、民族といったものを超えて訴えるものをもっている。と僕は思っています。そういうことを、有無をいわさず、突きつけてきたのはリヒターでした。

でも今聴くと、割合譜面に正直すぎて、四角四面という感じがしなくもないです。現代は学問が進み、当時の演奏習慣が色々わかってきて、当時の色々な楽器で演奏ができるようになると、そこから納得できるものや、その成果を生かした演奏をするグループが多くなってきました。

僕にとっては、桐山くん（ヴァイオリン）たちがやってくれる、学問的な立場にたったオリジナル楽器での音楽作りや色々な演奏習慣の面白さ、それから、かつて聞き終わって立ち上がれないくらい打ちのめされたリヒターの「ロ短調ミサ曲」演奏の中にあったバッハの巨大性、それら両方の接点をさぐりたいと思っています。

――自身の演奏スタイルについて、昔と今と変化はありますか？

それはもう大変に変わっているだろうと思います。そんな昔のことでなくても去年と今年でも、また変わっているだろうと思います。毎年暮れにゴールドベルク変奏曲を弾いていますが、一年一年ちゃんと見えてくるものが違うし、演奏は、自分があきらめない限り（上手くいけば）毎日毎日変わっていくものだし、またそうありたいと思っています。

――では、いつ聴いても何か違う発見がありますね

あります。バッハに関する限りはあります。バッハの音楽は、基本にきちんと向き合ってなければいけない音楽の一つだろうと思います。バッハしか弾けなくても、バッハがちゃんと弾けたら、多分色々なことができると思います。リストが上手い人はいると思いますけど、そういうひとに「バッハの曲を弾いてみて」といってみたら弾けるかどうか。こんなこといったら怒られるかな（笑）。

――先生にとってバッハってどんな存在ですか？

不思議な作曲家ですねぇ。同じ時代であってもバッハとヘンデルと並べると、ヘンデルはちょっと僕には料理し辛いですね。ヘンデルは時代べったりなんですね。その時代の趣味で色々なことを操作しないと、面白みがでてこない。

教会の音楽とバッハは結びついてはいるけども、では、バッハが信仰の厚い人だったかというとどうかわかりません。非常にまじめに信仰を持った人だったとは思うけど、今回演奏するレパートリーなどは教会とは関係ありません。とても人間的に生き生きした人だったのだろうと思います。まじめなときはまじめだし、笑うときは笑うだろうし。

――今回の演奏会の聴きどころを教えてください

有名な曲ばかりですし、色々な楽器の組み合わせが聴ける、贅沢なプログラムといえるのではないでしょうか？ただ、「ブランデンブルク協奏曲第2番」は高音のトランペットの演奏が大変難しいので、なかなかプログラムに入れられない曲です。また、「オーボエとヴァイオリンのための協奏曲」は、ニ短調で演奏されることが多いのですが、今回は新バッハ全集にしたがってハ短調で演奏します。これも楽しみの一つです。

――松本バッハ祝祭アンサンブルの結成のきかっけを教えてください

グループをまとめたのは桐山くんで、そして企画を考えたのは桐山くんと松本のホールのスタッフで、僕はそれに乗っけてもらっただけなのです。あそこのホール（ザ・ハーモニーホール）にチェンバロが入ったときに、チェンバロ開きをかねて10回のシリーズ公演を小ホールでやってくれたんです。そこでバッハをするのに私が呼ばれました。私としては、よく知っているメンバーですし、楽しいに違いないと思って喜んで乗っかりました。ですから首謀者の一人ではないのです。気持ちよく上に乗っけさせてもらって。勝手なこと言って、一番いい身分です。（笑）

――最後に、演奏会を楽しみにしているお客様へメッセージをお願いいたします。

バロック音楽というのは日本の伝統芸能みたいなもので、約束事をいくつか知っていると面白くなるという面はあります。ですが、バロック音楽が日本で流行り始めたきっかけとなったのはヴィヴァルディの「四季」ですよね。「四季」というのは、バロック音楽の約束事を知らなくても面白いでしょ？それと同じようにバッハの音楽を何も知らなくても、今回のプログラムは明るい気持ちとか楽しい気持ちになれる、エンターテインにしてくれる要素が強いですし、またそのために書かれた音楽がほとんどです。だから、あまり予備知識とか先入観とか持たずに、心をからっぽにしてお聴きになってみてはいかがでしょうか。我々もとても楽しんでやるので、楽しんで聞いていただける音楽会になると思います。バッハ独特の秩序と調和の世界が私たちの心情に染みわたって、楽しませ、慰めてくれますように。